

4 北海道学力向上 Web システム（小・中学校用）

(1) チャレンジテスト

これまでの全国学力・学習状況調査等の結果分析を踏まえ、本道の子どもたちが苦手としている学習内容を中心に、北海道独自の基礎問題として、チャレンジテストを平成21年度から作成・配布しています。

小学校第1学年から中学校第3学年用の国語、算数・数学、社会、理科、英語の問題があります。

過去のチャレンジテスト

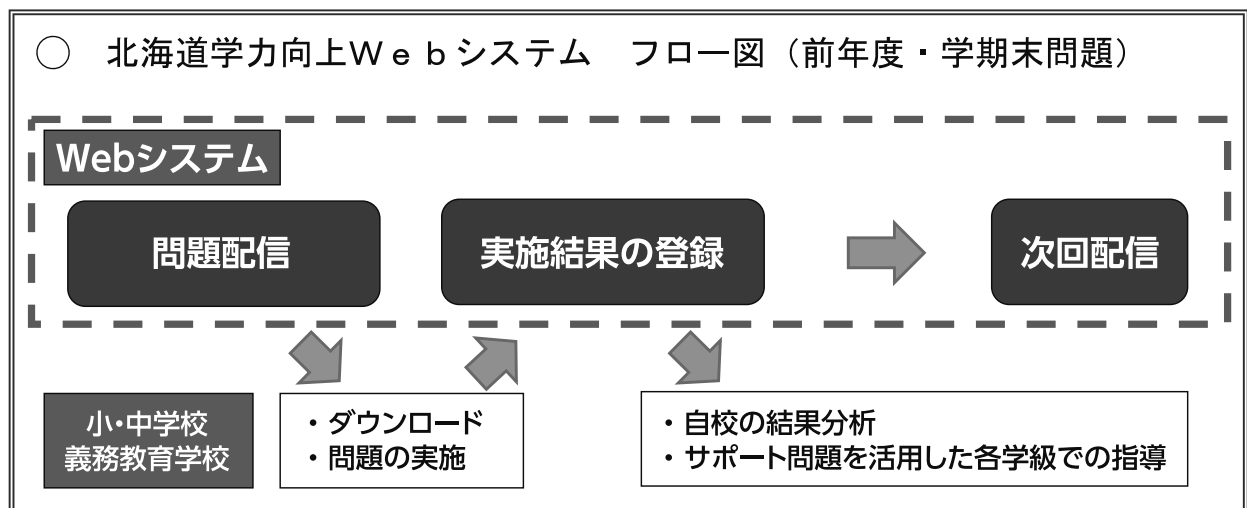
<http://www.dokyoj.pref.hokkaido.lg.jp/hk/gky/gks/ct/index.htm>

(2) 北海道学力向上Webシステム

北海道学力向上Webシステムは、チャレンジテストを配信し、各学校で結果を集計・分析ができるシステムです。このシステムを活用することで、チャレンジテストの実施から集計・分析までの時間が短縮し、全道・管内との比較が、自校の集計結果の入力と同時にできるとともに、集計結果を活用して、子どものおつまずきに合わせたきめ細かな指導や放課後等の補充的な学習サポートの充実などに生かすことができます。

チャレンジテストと北海道学力向上Webシステムを有効に活用し、全ての子どもが学習内容を確実に身に付けることができるようにしましょう。

○ 北海道学力向上Webシステム フロー図（前年度・学期末問題）



北海道学力向上Webシステム
のログイン画面

<https://gakuryoku.hokkaido-c.ed.jp/sys/>

※道教委が各学校にIDを配付し、各学校でパスワードを設定しています。

5 高等学校における学びの質の向上

北海道の公立高等学校においては、高校教育の質の確保・向上の観点から、基礎学力の定着や学習意欲の喚起を促すP D C Aサイクルの構築・確立に向けた、次の取組を実施しています。

(1) 学力テスト（道教委独自）

生徒の学習内容の定着状況を把握し、各学校における指導方法等の工夫・改善を図り、本道の高校生の学力向上を図ることを目的に平成26年度から実施しています。

また、令和元年度からは、「高校生のための学びの基礎診断」の測定ツールの一つとするため、難易度が異なる複数のレベルを引き続き設定するとともに、思考力・判断力・表現力等を把握できる記述式問題の出題や、英語4技能を測定できる問題を設定するなど、各学校における指導の工夫・改善に向けたP D C Aサイクルの取組が一層進められるようにしています。

○設定モデル

設定モデル名	対象と目的
コアアビリティモデル (Cモデル)	選抜性のある大学への進学を希望する生徒を除く全ての生徒を対象に、これからの時代に求められる資質・能力のうち、教科に関わる基礎的基本的な学力（コアアビリティ）を身に付けさせる。
ベーシックモデル (Bモデル)	選抜性のある大学（「大学入学共通テスト」を課す大学）への進学を希望する生徒を対象に、当該大学への進学に必要とされる学力を身に付けさせる。
アドバンストモデル (Aモデル)	選抜性の高い大学（北海道大学、東北大学、東京大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、九州大学、医育大学など）への進学を希望する生徒を対象に、当該大学への進学に必要とされる学力を身に付けさせる。

○実施する教科

【Cモデル】 国語、数学、英語	【Bモデル】 国語、数学、英語	【Aモデル】 国語、数学、英語
--------------------	--------------------	--------------------

<高校生のための学びの基礎診断とは>

各学校におけるカリキュラム・マネジメントの一環として、学習成果や課題を把握し、その結果を教育課程や主体的・対話的で深い学びの視点からの学習・指導方法の改善に生かすことを目的としている。

(2) 学習状況等調査（道教委独自）

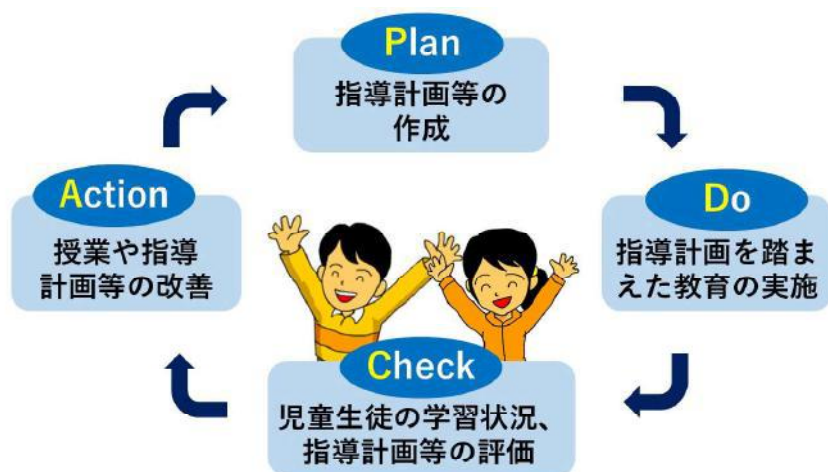
高等学校第1学年（年次）を対象に各教科に関する興味・関心や学習意欲を測るとともに、家庭学習への取組状況を把握して、各学校における指導方法等の工夫・改善を図ることを目的に実施しています。

6 学習評価

学習評価は、学校における教育活動に関し、児童生徒の学習状況を評価するものです。「児童生徒にどういった力が身に付いたか」という学習の成果を的確に捉え、教師が指導の改善を図るとともに、児童生徒自身が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができるようにするためにも、学習評価の在り方は重要であり、教育課程や学習・指導方法の改善と一貫性のある取組を進めることが求められます。

(1) カリキュラム・マネジメントの一環としての指導と評価

各学校は、日々の授業の下で児童生徒の学習状況を評価し、その結果を児童生徒の学習や教師による指導の改善や学校全体としての教育課程の改善、校務分掌を含めた組織運営等の改善に生かす中で、学校全体として組織的かつ計画的に教育活動の質の向上を図っています。このように「学習指導」と「学習評価」は学校の教育活動の根幹であり、教育課程に基づいて組織的かつ計画的に教育活動の質の向上を図る「カリキュラム・マネジメント」の中核的な役割を担っています。



(2) 共感的な児童生徒理解の充実

児童生徒の学習活動を支援するためには、指導する前に児童生徒一人一人の思いや願い、よさや可能性を捉えるとともに、学習活動の過程においてそれらが高まり、豊かになっていく状況を愛情をもって共感的に理解することが大切です。

ポイント

- 様々な思考や判断、表現などをその児童生徒のよさの表れと捉える。
- 児童生徒と教師が信頼し合う温かな雰囲気をつくる。
- 活動における戸惑い、悩み、実現の困難さなどを温かい気持ちで感じ取る。
- 全体的な特徴を広い視野で多面的に捉える。(チーム・ティーチングなどの活用)
- 一人一人のよさや可能性が高まっていく大きな流れを捉える。

(3) 学習状況を把握する評価の観点

学習指導においては、各教科等の目標の到達状況を把握するため、次の3つの観点を設定します。学習指導の過程や成果を総合的に把握するために評価規準を設定し、それに沿って学習状況を把握し、児童生徒一人一人の学習指導の支援に生かすことが大切です。

そのためには、各学年における各教科の単元（題材）のねらいに即して評価規準を設定し、一単位時間の学習目標に応じて、評価項目として具体化していく必要があります。

<小中学校>

	評価の観点	評価の観点に関する考え方
観点別学習状況の評価	「知識・技能」	各教科等における学習の過程を通じた知識及び技能の習得状況について評価を行うとともに、それらを既存の知識及び技能と関連付けたり活用したりする中で、他の学習や生活の場面でも活用できる程度に概念等を理解したり、技能を習得したりしているかについても評価するもの。
	「思考・判断・表現」	各教科等の知識及び技能を活用して課題を解決する等のために必要な思考力、判断力、表現力等を身に付けているかを評価するもの。
	「主体的に学習に取り組む態度」	各教科等の「主体的に学習に取り組む態度」に係る観点の趣旨に照らして、知識及び技能を習得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりするために、自らの学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤するなど自らの学習を調整しながら、学ぼうとしているかどうかという意思的な側面を評価するもの。

<高等学校>

	評価の観点	評価の観点に関する考え方
観点別学習状況の評価	「知識・技能」	個別の知識及び技能の習得状況について評価する。それらを既存の知識及び技能と関連付けたり活用したりする中で、概念等として理解したり、技能を習得したりしているかについて評価するもの。
	「思考・判断・表現」	各教科等の知識及び技能を活用して課題を解決する等のために必要な思考力、判断力、表現力等を身に付けているかどうかを評価するもの。
	「主体的に学習に取り組む態度」	知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組の中で、自らの学習を調整しようとしているかどうかを含めて評価するもの。

(4) 評価の方法の工夫

教師の観察による評価

児童生徒一人一人にどの程度の資質や能力が身に付いているか、よさや可能性が高められているかなどの状況について、その表情、発言、行動などの観察に重点をおいて把握することが大切です。

観察の観点

- ・課題意識をもち、自分なりに意欲的に追究・解決しているか。
- ・追究・解決したことをまとめ、自分なりに表現しているか。
- ・グループ別学習などで、自分の考えを確かにしようと他者と協力しているか。
- ・学習したことを応用したり、新しい学習への意欲をもとうとしたりしているか。

自己評価と相互評価

自ら学び続ける意欲をはぐくむためには、自分が行ってきた学習について振り返る機会が必要です。その方法として、自己を見つめ自分の学習改善に役立てるなどの自己評価や、友達によさに気づき、自分に生かすための相互評価などがあります。

このような評価を授業に位置付けることを通して、児童生徒一人一人が自分のよさに気づき、自信をもつことができるように指導することが大切です。

自己評価の方法	自己評価の留意点
<ul style="list-style-type: none">・文章記述(ノート、感想文など)・自己チェックリスト・自己作品分析(新聞、紙芝居など)・身体表現(劇化など)・話し合い、討議など	<ul style="list-style-type: none">・自分の学習目標をもたせる。・情意面を評価させる。・新たな課題や気づきをもたせる。・評価の結果を受け止め、原因を考えさせる。

